

温暖化に憂う

和歌山生協病院 病院長 古田 光明

わが病院は149床の小さな病院であるが、臨床研修指定病院でもあり週1回の早朝医学英語論文の抄読会を、私も含め3人の医師と研修医で行っている。30年以上も続けている。当院は予算の関係上、医学雑誌を十分そろえることができないため、論文の取り寄せは近畿病院図書室協議会会員所蔵館にお願いしている。抄読会は1カ月に1回当番が回ってくるため、私にとっては大変なことであるが、退職までは続けていこうと思っている。そのためには体力が重要である。私は車に乗らず、台風の日も自転車で通勤している。以前はジョギングで通勤していたが流石に今はできない。

自転車に乗りながら途中小さな川沿いを走るのであるが、川底にはスーパーのレジ袋が沈んでいるのを見かける。これらのゴミもマイクロプラスチックとなり、人間の胃袋に戻ってくると考えると恐ろしく思う。私たちは1週間でクレジットカード1枚分を口にしてしているようだ。現在海に流入しているマイクロプラスチックの量は、年間100万トンになり、2040年には2,900万トンに達するというから何とかしなければという思いになる。コロナパンデミックで大量のマスクが消費されているが、すでに日本の使い捨てマスクは海流に乗って、はるかかなたのヨーロッパの海岸に打ち寄せられているというニュースを見て衝撃を受けた。

知的興味で最近2冊の本を読んだ。一冊目はジャーナリスト David Wallace 著『地球に住め

なくなる日』でタイトルが強烈だ。著者は、今まで科学者が報告したデータをもとに、今後の地球の未来について述べている。パリ協定を実現しないと、今世紀末までに平均気温は3.2℃上昇してしまうことは確実であると言う。わずか3.2℃という感覚だが、2020年の8月は和歌山でも最高気温37℃を更新した。とても屋外で働ける気温でないことが実感としてわかった。世界の100都市が水没してしまうということだ。食料不足も心配だ。日本周辺の海水温も100年の間に1.14℃上昇しているという。日本人には欠かせない昆布は冷たい海でしか育たないが、国連の予想したシナリオ通りとなると、昆布は姿を消すそうだ。それだけではない。クロマグロ、ホタテ貝、鮭、サンマも食べられなくなるそうだ。

夏の平均気温が35℃に達する都市は、世界で354カ所あるが、2050年には970都市に増えると予想されている。また1℃上昇すると穀物収穫量は10%減少するというルールがあるそうだ。世界の耕作可能地帯で急速に砂漠化が進んでおり、今後地中海地域やインドの大半は穀物が収穫できなくなるという。今後、人口増加が予想される中で、食糧問題が人類の生存にとって大きな問題になってくるのは間違いない。

この夏もシベリアの極寒の地で38℃を記録し、凍土が溶け出したというニュースがあったが、北極地域の凍土が融解し始めると、内部に閉じ込められている二酸化炭素が放出され、その量は大気中に存在する二酸化炭素の2倍になる。メタンも蒸発しダブルパンチを受けることにな

る。

もう一冊は、若手研究者である大阪市立大学准教授の斎藤幸平氏著の『人新世の「資本論」』である。先進国に暮らす我々は、大量生産、大量消費の豊かな生活を実現している。しかしそこには発展途上国の犠牲があってこそ成り立っている。豊かさを維持するためには、外部の社会を作り出し負担を転嫁してきたという。先進国の受け皿となってきた中国などは経済発展を遂げ、安価な労働力ではなくなり、外部への転嫁の余地がなくなってきた。二酸化炭素を吐き出して成長し続けることに限界がきていることも確かだ。そろそろ生産減速を受け入れるしか

ないというのが著者の考えである。私も同感である。仮に世界の人がアメリカ人並みの生活を営むと地球は5、6個も必要らしい。このことから生産量を増やし続けることに限界がある。

地球は一つですべてつながっている。子孫に住める地球を残すことも我々の使命である。地球の自然を守り、どのような社会を作っていくのかは、極めて倫理的な判断が必要で、そのための政治的判断が求められていると言えよう。今からでも個人としてもできるところから始めたいものだ。二冊の本に刺激を受け、今日も二酸化炭素を出さない自転車通勤としよう。